

派遣者番号	R7K08	氏名	植木 啓介
研究主題 —副主題—	「立ち止まる」学習者を育む構築主義歴史教育の実践研究 —「線引き」の政治性と「ヴァルネラビリティ」に着目した日本史探究—		
派遣先大学	東京学芸大学教職大学院	指導担当者	及川 英二郎
所属	東京都立日野高等学校	所属長	米山 琢児

キーワード：構築主義 立場性 ヴァルネラビリティ ネガティブ・ケイパビリティ 日本史探究

要旨： 本研究の目的は、構築主義歴史教育において「客観的に分析する学習者」がいかなる契機で「当事者として立ち止まる学習者」へと変容するのか、プロセスを明らかにすることである。そのため、日本史探究において、「線引き」の政治性と「ヴァルネラビリティ」に着目した単元を開発・実践した。分析の結果、8割以上の生徒が事象を客観的に分析した一方で、明確な答えを出すことで「分からない」状態を回避し、対象を「他者化」している状態も見られた。この限界を乗り越えるための契機となったのが、「線引きの恣意性の追究」と「授業者の葛藤の開示」である。変容した1割強の生徒は、無意識の他者化や権力側への同化という自身の立場性に気付き、早急な解決を求めず真摯に対象と向き合う「ネガティブ・ケイパビリティ」を発揮した。本研究は、こうした生徒の戸惑いを見逃さず、重要な学びのプロセスとして位置付け、これからの歴史教育の新たな展望を提示するものである。

「立ち止まる」学習者を育む構築主義歴史教育の実践研究

ー 「線引き」の政治性と「ヴァルネラビリティ」に着目した日本史探究 ー

植木 啓介

1. 研究の背景

(1) 高等学校における歴史教育の課題

現在の歴史教育には、「探究の形式化と本質主義の温存」という課題がある。教科書記述を唯一の正解として無批判に習得させる指導は、本質主義的な歴史認識を学習者にもたせてしまう。概念やカテゴリーなど「言葉の構築性」に対して疑いの視点をもたず、その構築過程に含まれる課題を無自覚なままに受け入れてしまうことは、「言葉」に潜む偏見や排除を社会に温存してしまうことにつながる。これに対して、歴史叙述や概念、カテゴリーを社会的な構築物として捉える構築主義のアプローチが有効である。

(2) 先行研究の到達点と本研究の意義

高橋（2015）、矢景（2025）などの先行研究は、学習者が歴史の構築性を疑い、対象を客観的に分析して課題を解決する能力を育成してきた。一方で、客観的な分析は、学習者と対象との間に一定の距離を確保してしまい、当事者としての葛藤を回避させる懸念がある。

そこで本研究では、客観的な分析を土台としつつ、学習者が歴史を学ぶ当事者としての葛藤に向き合い、より深い他者理解・自己理解へと至るための新たなアプローチを提示する。具体的には、帯木（2022）が提唱する「ネガティブ・ケイパビリティ（答えの出ない事態に耐える力）」を引き出す契機として、「ヴァルネラビリティ（脆弱性）」に着目する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、構築主義歴史教育における学習者の変容プロセスを明らかにすることである。そのために、構築主義のアプローチを取り入れた単元を開発・実践し、見方・考え方がどのように働いたのかを検証する。さらに、「客観的に分析する学習者」がいかなる契機で「当事者として立ち止まる学習者」に変容するのかを記述分析を通して明らかにし、「線引き」の政治性と「ヴァルネラビリティ」に着目した構築主義歴史教育の有効性を検証する。

3. 単元の開発

(1) 構築主義的な見方・考え方とヴァルネラビリティ

本研究では、学習者が働かせる構築主義的な見方・考え方を「カテゴリーや概念の構築性を疑う見方・考え方」と「私の立場性を問い直す見方・考え方」に整理した。これは、事象を社会的な構築物として捉えるだけでなく、それを分析する「私」自身も、特定の立場や時代状況によって構築されたものとして認識する視座である。しかし、こうした分析だけでは、学習者は客観的な分析者の立場に固定されてしまう。そこで本研究では、学習者が当事者へと変容する契機として、小川（2021, 2025）、栗原（2015）らを参考に、「他者の苦痛に応答するために必要な、開かれた感受性」である「ヴァルネラビリティ」の自覚を授業に組み込んだ。客観的な分析を土台にした上で、「線引きの恣意性の追究」や「授業者の葛藤の開示」を通して、学習者の葛藤を喚起する。その際、学習者が自身の「分からなさ」に向き合おうとする様子が見られた場合、それを「ネガティブ・ケイパビリティ」すなわち「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」（帯木, 2022）が発揮された姿として位置付ける。実践分析においては、この状態を見取るための客観的な指標として、「記述への慎重さ」を設定する。

(2) 開発単元Ⅰ「日本史へのまなざし」 / 開発単元Ⅱ「中世の扉」

単元Ⅰ（近現代史）では、「日本人」「男女」「われわれ」などのカテゴリーに焦点を当て、言葉に隠された線引きを解き明かし、自身に内面化された「当たり前」を問い直させた。単元Ⅱ（中世史）では、「ケガレ」「武士」などの概念が、政治的な意図をもって構築された背景を読み解かせた。いずれの単元も、歴史事象を分析する自身の視点が、対象に同情することでかえって歴史を「他者化」していたり、無意識のうちに権力側に同化していたりすることに気付かせ、ヴァルネラビリティに開かれた状態を自覚させることを目指した。

4. 4象限モデルによる分析

実践の分析には、縦軸に「構築主義的な見方・考え方が働いているか」、横軸に「記述への慎重さがみられるか」を設定した、独自の4象限モデルを用いた。

[単元Ⅰ 4象限による分類結果]	
第1象限：	19名 (13.29%)
第2象限：	121名 (84.62%)
第3象限：	2名 (1.40%)
第4象限：	1名 (0.70%)
[単元Ⅱ 4象限による分類結果]	
第1象限：	16名 (11.35%)
第2象限：	97名 (68.79%)
第3象限：	28名 (19.86%)
第4象限：	0名 (0.00%)

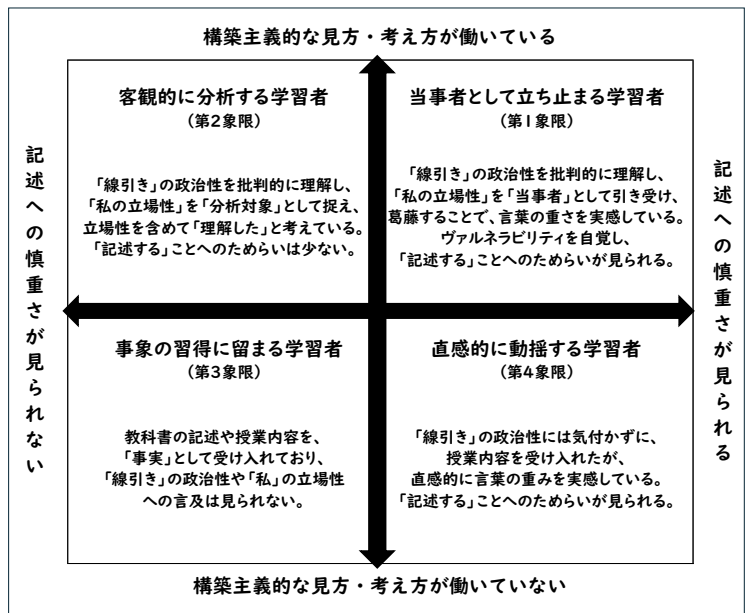


図 分析枠組みとしての4象限モデル

実践の結果、二つの単元ともに8割以上の生徒が構築主義的な見方・考え方を働かせて歴史を分析し、第1・第2象限に位置付いた。大多数を占める第2象限の生徒は、線引きの政治性を理解した上で、「差別はあってはいけない」という規範的な正解を見いだしたり、第三者としての客観的な立場をとったりする姿が見られた。これは、社会認識の深まりとして高く評価される姿である一方、明確な答えを出すことで「分からない」状態を乗り越え、対象を「他者化」して分析的な距離を確保している状態とも捉えられる。

こうした「他者化」を乗り越える契機となったのが「線引きの恣意性の追究」や「授業者の葛藤の開示」である。これを受けて、全体の1割を超える生徒が第1象限へと変容した。第1象限の生徒は、歴史の構築性やカテゴリーの政治性を深く理解したことで、現代の「当たり前」の前提を失い、自身の言語行為に対して戸惑いを抱くようになった。さらに、客観的な分析者としての同情がかえって他者性を強める懸念があることや、歴史を見る自身の視点が無意識のうちに権力側に同化していたという構造的な線引きに気づき、自らの立場性に対する葛藤も生じていた。このように、早急に解決を求めず、言葉の重みを自覚して慎重になり、「分からないまま」の状態に耐えながら、真摯に問題と向き合い続ける姿こそ、ネガティブ・ケイパビリティが発揮された当事者としての学びである。

5. 研究の成果と展望

(1) 研究の成果

本研究の最大の成果は、第1象限の生徒が見せた「立ち止まる姿」を、理解不足ではなく「思考を深めている状態」と捉え直し、ネガティブ・ケイパビリティという概念を用いて「重要な学びのプロセス」として位置付けたことである。これまで、現場の教員が手応えを感じつつも客観的な評価が難しかった姿を、本アプローチによって積極的に見取ることができるようになったことは、構築主義歴史教育の限界を乗り越える上でも有効であり、新たな到達点といえる。

また、第2象限に位置付けられた生徒も、構築主義的な見方・考え方を働かせることで、問いの質が向上しており、構築主義歴史教育の有効性が確認された。これは、探究的な学びが推進されている高等学校歴史教育において、重要な成果である。

(2) 研究の課題と今後の展望

単元Ⅱにおいて第3象限が増加したことから、時間的距離のある前近代史を扱う場合、学習者と歴史事象の距離を埋めるための足場かけが必要になることが判明した。さらに注視すべきは、第4象限「直感的に動揺する学習者」の存在である。構築主義的な見方・考え方が働いていない中で不安になった生徒は、その「分からなさ」を早期に解決するために、歴史を単純化して理解したり、一面的な解釈を安易に受け入れたりしてしまうおそれがある。

これらを踏まえ、生徒が多様な情報が溢れている社会に出る前に、教室の中であえて戸惑い、葛藤を重ねて、「慎重さ」を育むことの意義を、これからの歴史教育の展望として示すとともに、自身も実践を重ねていきたい。

6. 主要参考文献

- ・上野千鶴子編（2001）『構築主義とは何か』勁草書房。
- ・及川英二郎（2017）「構築主義とジェンダー、セクシュアリティ」東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のためにー現在をどう生きるか』岩波書店 pp. 127-144.
- ・小川公代（2021）『ケアの倫理とエンパワメント』講談社。
- ・小川公代（2025）『ケアの物語 フランケンシュタインからはじめる』岩波新書。
- ・栗原彬編（2015）『人間学』世織書房。
- ・高橋健司（2015）「記念碑から読み解く歴史学習ー二つの「平和の塔」を手がかりとしてー」井田仁康ほか編『中等社会科 21 世紀型の授業実践ー中学校・高等学校の授業改善への提言ー』学事出版 pp. 71-78.
- ・帯木蓬生（2022）『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版。
- ・矢景裕子（2025）「「世界史へのまなざし」としての人類史 「進化」への言説を教室で検討するころみ」前川修一ほか編『歴史教育「シン」入門 歴史総合から世界史探究・日本史探究へ』 pp. 102-109.